



松尾クリニック理事長

松尾 美由起

(46)

だれでも仕事をしているときに感動の瞬間というものがある。大阪府八尾市を舞台に在宅診療に飛び回る開業医の松尾が最近、最も感動したのは、九十四歳の寝たきりの男性を訪ねたときのことだ。

「診察を終えて帰ろうとしたら、手をぎゅっ握って離そうとしないんです。呼吸困難で言葉が出ないものだから、手と目で必死に『アリガトウ』と伝えようとしてくれたんですね」

松尾が近鉄・八尾駅前に診療所をオープンしたのは九年前。診療所での診療と合わせて、当初から寝たきり老人宅に往診したりする在宅医療を手掛けた。翌年、看護婦二人が出かけていき洗濯や入浴の介助などをする訪問看護も始めた。

健康保険の診療報酬の改正によって、在宅医療がなかなか採算が合うようになつたのは最近のこと。彼女がそんなに早い時期から在宅医療に取り組むようになったのはなぜなのか。「いくつかの診療所が協力し合って在宅医療を行い、基幹病

まつお・みゆき 一九四八年(昭和二十三年)大阪生まれ。広島大学医学部卒、大阪淀川キリスト教病院、八尾徳洲会病院を経て、八五年に松尾クリニックを開設。夫は勤務医、娘が三人。長女は医学部で学ぶ。

患者思い在宅診療24時間態勢

院とネットワークを組めるようになれば、地域医療は患者さんにとってずっと質の高いものになる。で、とりあえず自分のところから始めてみたくです」。

一日二十四時間、患者はいつでも松尾に連絡がとれる。携帯電話、自動車電話、ポケベルを駆使してホットラインを作り、マイカーにはいつも往診セットを積んでいる。休みの日、子供と映画を見ているときにポケベルがなり、子供を連れて往診にいったこともある。現在、彼女が抱える在宅医療の患者は、百二十六人。このうち十一人が寝たきりの状態から、通院できるまでに回復している。

診療所がオープンした翌年には、松樹会(会員二百五十人)という患者の会も自然発生的に誕生した。年に四回開く例会では健康についての講演を聞いたり、歌を歌ったりする。バス旅行にも出かける。コーラスや演劇、書道などのグループがあるなど、活動は実に多岐だ。

「患者さんの立場に立った医療を実践し続けたい」。こんな姿勢の開業医が近所にてくれたら心強い。(敬称略)

文 足立 則夫
写真 長田 浩

日本の
現代